第２２５回　「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

いつ終わってくれるのかと、やきもきしていた今年の猛暑ですが、１０月も中旬を越えますと、朝夕、随分と涼しくなり、雨の日には寒いと思う時もあるくらいで、ようやく待望の「秋が来た」と、思っている昨今です。

今月の対面句会は１０月１３日（金）、いつもの新橋ばるーんに、下述した１１名の仲間が参加し、俳句談義と言うか、俳句ディスカッションというか、厳しい言葉のやり取りもあり、でも相対的には、和やかな句会であったと思います。今月は課題として、晩秋の句、三句を詠むことになっていましたが、必ずしも晩秋の句が揃ったわけではなく、冬の句が提出されていたり、大まかな区切りの中での句会となりました。

今月も投句は多佳さんにお送りし、多佳さんに「投句一覧表」の作成から、「選句の結果記録」までお世話になりました。有難うございます。今月は下述の通り、「道草」全員となる１８名の句が集まりました。いつものように天賞句１８票と、得票数の多かった上位３名の行方を楽しみにしつつ、句会は進行しました。なお、最多得票賞（☆印）の選定は、得票数が同じ場合、その得票数を獲得した全員の句をご披露するようにしています。そして今回のように、得票数８票の方が１人、次点の得票数６票の方が４名の場合は、この５名の方を最多得票賞（☆印）としています。

○　投句参加者（１８名）
芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、
辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原 晶如さん、舩戸清助さん、
本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

○　対面句会参加者（１１名）
明峰さん、柴楽さん、創風さん、傘吉さん、多佳さん、荻女さん、
一光さん、月草さん、和感さん、晶如さん、白然。

天賞句並びに優秀句

◎『バス停に一人となりし秋の暮』	明峰	天３☆８
◎『秋日和老い深々と舟を漕ぎ』	栄女	天３☆６
◎『星月夜見果てぬ夢を追い求め』	蒼樹	天２☾２
◎『もみじ葉の散りて川面の色となる』	多佳	天１☾４
◎『大かまきり風に古武士の面構へ』	荻女	天１☾４
◎『菊枕深い眠りに引き込まれ』	錦流	天１☾４
◎『番傘の墨艶やかに時雨宿』	栄女	天１☾３
◎『はたと止む竹伐る音に日の暮るる』	まさあき	天１☾２
◎『秋色を待ちて何時もの散歩道』	憧岳	天１☾２
◎『刈られたる萩を離れぬ蝶のあり』	白然	天１☾２
◎『紅葉山無言の風の中にをり』	清助	天１☾１
◎『木犀の香に誘はれ路地伝ひ』	傘吉	天１☾１
◎『忍野八海秋明菊の白きこと』	白然	天１☾１
◎『朝まだき空満月の白くあり』	歌多音	☆６
◎『秋晴れや天に繋がる股のぞき』	創風	☆６
◎『断捨離や行きつ戻りつ秋湿り』	蒼樹	☆６

今月の最多天賞獲得句は、明峰さんと栄女さんが、それぞれ三票を獲得しました。明峰

さんは先月も最多天賞を獲得しましたが、今回は「バス停に一人となりし秋の暮」が、天賞を三つ、しかも投票数８票で、最多得票賞（☆印）も併せて獲得しました。お見事でした。「バス停で待つ人が、自分一人になってしまった」という情景の中に、秋の暮の侘しさを見事に描き出していました。同じく天賞三つと多数得票賞（☆印、得票数６票）を獲得した栄女さんの句「秋日和老い深々と舟を漕ぎ」は、句会の討議の中では「老いが深々と舟を漕ぐ」という部分の解釈で、「老いの居眠りの情景を言っているのではないか」という解釈と、「残り少ない人生という舟の櫓を懸命に漕いでいる」という二つの解釈があることが判明しました。句会席上の討議形勢としては、前者の方が多かったように思われます。

次に蒼樹さんの句「星月夜見果てぬ夢を追ひ求め」が、天賞二つを獲得しました。天賞推挙のコメントとして、「ロマンを感じる好きな句です。プラス思考が好いですね」と「若い時にこのような気分になったことを思い出し、若返った気持になりました」の二つがありました。年齢を重ねても「いつも前向きの姿勢で人生に臨むこと」、季語の「星月夜」が、この句にはフィットしているというご意見のようにも思いました。次に多佳さんの句「もみぢ葉の散りて川面の色となる」が、天賞一つを獲得しました。紅葉した落ち葉が川面に浮かび、まさに川面の色となるという光景です。天賞推挙のコメントには「故郷の丹波を思い出し懐かしくなった」とありました。

次に荻女さんの句「大かまきり風に古武士の面構へ」が、天賞一つを獲得しました。かまきりは近づくと、鎌のような両足を広げ闘いポーズになります。風にも同じ格好で構えるのでしょう。そのポーズを古武士の面構へと表現、読者の共感を得たのでしょう。次に錦流さんの句「菊枕深い眠りに引き込まれ」も、天賞一つを獲得しました。季語「菊枕」の登場です。良い季語を登場させたこと、菊枕を使用した体験談がコメントにありましたが、芳香と邪気を払うという謂れに大満足をしたコメントがありました。

次に栄女さんの二句目「番傘の墨艶やかに時雨宿」も天賞一つを獲得しました。句全体からは京の瀟洒な宿屋が想起されます。中七で「墨艶やかに」と番傘の文字を表現し、宿屋の誇りのようなものを感じさせているのではないでしょうか。「時雨」は冬１１月の季語ですが、それを超えて、投票を惜しまない読者が居ました。

次にまさあきさんの句「はたと止む竹伐る音に日の暮るる」も、天賞一つを獲得しました。句全体からは晩秋の日常、静寂な里の一日が思い浮かんできます。この句、季語「竹伐る」は、都会暮らしでは思いつかない一句です。何か秋の侘しさがひたひたと迫ってくる、妙に懐かしい句になりました。次に憧岳さんの句「秋色を待ちて何時もの散歩道」が、天賞一つを獲得しました。「いつもの散歩道が秋色に変わるのを心待ちにしている作者」と「秋色の散歩道って、どんな道なのかしら」と、興味を持った読者の共感というか、その思いが、この句を天賞に導きました。句会の愉しみを覗いたように思います。

次に清助さんの句「紅葉山無言の風の中にをり」が、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントには「秋の夕暮れ、紅葉山に対峙する作者の思いがひしひしと伝わってくる。高い心象風景が感じられた」とありました。余計なことかもしれませんが、下五は「中にをり」よりも「中にあり」の方が、良いのではないでしょうか。次に白然の句「刈られたる萩を離れぬ蝶のあり」が、天賞一つを獲得しました。季語である「萩刈」を立てた句にしたつもりが、句全体を吟味すれば、秋の蝶を季語の主体にすべきであるとのご意見をいただきました。推敲し直しです。

次に傘吉さんの句「木犀の香に誘はれ路地伝ひ」が天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントにありましたように「木犀が匂うと、ついついどこで咲いているのかと探してしまいますね」というのが、読者全員の感じではないでしょうか。もう一つ、白然の句「忍野八海秋明菊の白きこと」も天賞一つを獲得しています。天賞推挙のコメントに「忍野八海の透明な水と富士には秋明菊が似合いますね」とありましたが、八年前に吟行で行った

忍野八海の透明な水への強い印象が未だに残っています。この透明感が、秋明菊の白さに連鎖しているのだと。

天賞はつきませんでしたが、最多得票賞（☆印）の方が、３名いらっしゃいました。先ずは歌多音さんの句「朝まだき空満月の白くあり」が、６票を獲得しました。この句は眠られずに、朝方まで起きていたか、さもなければ早朝というのにも、まだ早い時間に目が覚めて、でも西方に傾いていく月が、満月であることは知っていて、絶好の観月になったというのでしょうか。印象深い句になりました。

次に創風さんの句「秋晴れや天に繋がる股のぞき」も、６票を獲得し、最多得票賞（☆印）に選ばれました。余りにも有名な天橋立の股のぞきです。さらりと見事に表現されました。中七に「天に繋がる」と表現したのが、効果的であったと思われます。読者にはその情景が見えてくるようです。

次に蒼樹さんの句「断捨離や生きつ戻りつ秋湿り」も、同じく６票を獲得して、最多得票賞（☆印）を得ました。断捨離の勇気はどなたにもご経験のあるところでしょう。ひと言として、次の感想を述べられた方がいます。「今度こそと意を決して事に臨むが、毎度のごとく、どの品にもその時々の思いが甦って、一向に片付かない。ありふれた情景と言えばそれまでだが、下五の「秋湿り」が活きている」と。

歳時記を読んで季語を決め、句を詠むようになって、３か月目になるのでしょうか。新しい「季語」との出会いが増えてきました。季語自体には歳時記の中に整理付けて掲載されており、詠み手にとっては、句に詠んで初めて出会うことになる訳です。例えば「星月夜」という季語は、「ほしづくよ」と読み、月の出ていない澄んだ夜空を、星が宝石を鏤めたように輝き、まるで月夜であるような明るい夜空を言った言葉です。小生はいつか「星月夜式部ゐませば恋語り」という句を詠みました。今月は蒼樹さんが「星月夜見果てぬ夢を追ひ求め」を詠まれました。

来月は１１月、俳句の季語では、もう「冬の季語」です。皆さんの句には、どんな季語を使われ、どんな句が提出されるか、いまから楽しみです。そして翌月は１２月、年末が近づいています。残り少ない令和５年を元気に明るく生きていきましょう。

（白然記）